

## 生と歴史の論理学

### －田辺元「種の論理」の生成・構造・展開－

竹花洋佑

#### 1. 問いの所在

本博士論文は、田辺元の「種の論理」の哲学的意義を探ることを目的としている。「種の論理」は多彩な田辺元の思想群の中で最も議論の対象となってきたものであるが、これまで正当な評価を受けてきたとは言い難い。その理由としては主に二つ考えられる。第一の理由としては、田辺哲学の意義は常に西田幾多郎の思想との関係で測られてきたという事情が挙げられる。よく知られているように、田辺は「種の論理」を提起することによって西田哲学の批判的超克を試みた。この点に注目して「種の論理」の価値を探ろうとするならば、当然にも西田批判の妥当性が「種の論理」の価値の所在ということになる。ところが多くの論者が指摘しているように、田辺の西田批判は正当性を持たないところが多々あり、また田辺によってその不在を指摘される社会や歴史への視座が西田哲学に欠落しているわけでは決してない。そのように見た場合、「種の論理」から思想的意義として取り出せるものはごくわずかになってしまう。第二に、「種の論理」の挫折ないしは国家主義的変質という問題がある。田辺の「種の論理」はその最終局面において国家の絶対化を帰結したことは確かである。無の「応現的存在」としての国家という思想がそれである。『懺悔道としての哲学』に始まる戦後の宗教哲学的思想は、国家の役割の肥大化をもたらした倫理主義的立場の根本的反省に基づくものである。しかしながら、『懺悔道としての哲学』を境とした前期と後期とのこのような断絶が強調されすぎるならば、「種の論理」は後期思想の否定的な踏み台としての意義しかもたないことになりかねない。

そもそも、「種の論理」はすでに価値あるものとして権威づけられた西田哲学との関係においてのみその意味が捉えられるべきものなのか。あるいはまた、「種の論理」とは結局は後期の他力哲学において克服されるべき自力主義的なエピソードにすぎないのか。この二つの疑念に対して否と答えるところに本博士論文の問題意識はある。「種の論理」は西田哲学の補完

物でも、単に国家主義への転落を運命付けられた思想でもない。それは国家論や西田批判である前に固有の意味を備えた一つの哲学である。「種の論理」はそのようなものとして読まれるべきものであり、読まれうるものである。

## 2. 基本的主張

ただ、実際の「種の論理」は極めて複雑で、しかも常に生成途上の思想である。そのため、「種の論理」の哲学としての価値を際立たせるために、本博士論文はその本質を、あえて次のような単純なテーゼによって表現することにした。すなわち、「種の論理」とは生を特殊性において把握する論理である。より詳しく言えば、生が個体と普遍との媒介であることによって、特殊としての位置を獲得する動的な構造を解明するのが「種の論理」であり、端的に言って、それは生の論理である。このように捉えることにより、田辺の哲学は西田哲学の対立物としてだけでなく、生と論理の調停という西田と同様の問題に別の仕方で迫ろうとしたいわば思想的な同志としても理解されることになる。同時に、田辺の生の論理は歴史的なものへの志向に貫かれた歴史的な生の論理でもあることによって、結果として歴史主義という立場を田辺に獲得させる。紆余曲折を極めた「種の論理」の展開がもたらした積極的な価値はこの歴史主義という思想にあると本博士論文は考える。

## 3. 構成

序論において、「種の論理」が哲学として捉えられなければならない必要性和、それを可能にする視点が生と歴史ないしは歴史主義にあることを論じた。続く本論においては、「種の論理」の意味が、その生成、構造そして展開という順序で明らかにされる。序論を含む本博士論文の構成は以下の通りである。

### 序論

#### 第1部 「種の論理」の生成

##### 第1章 田辺の西田批判と歴史の偶然性

##### 第2章 超越と身体

##### 第3章 個体性と普遍性の弁証法—微分から瞬間へ—

##### 第4章 「繫辞の判断論」

#### 第2部 「種の論理」の構造と展開

- 第1章 種とは何か—種概念の由来と意味—
- 第2章 「種の論理」の基本構造—「社会存在論」としての「種の論理」—
- 第3章 生の歴史的構造—「絶対媒介の論理」と「世界図式論」—
- 第4章 種の自己否定性と切断—生と連続性—
- 第5章 「種の論理」のアポロギア—論理的なものの所在をめぐって—
- 第6章 田辺の国家論と歴史主義の成立—「還相」の論理の展開と田辺の歴史哲学—

本論は、「種の論理」提唱以前の田辺の思想を扱う第1部と、「種の論理」提唱以後の思想を論ずる第2部とに分かれる。第1部が扱っているのは、「西田先生の教を仰ぐ」（1930年）、「総合と超越」（1931年）、「人間学の立場」（同年）、『ヘーゲル哲学と弁証法』（1932年）、『哲学通論』（1933年）などの、「種の論理」提唱直前の30年代前半の論文および著作である。第2部は、「種の論理」がはじめて提唱された「社会存在の論理」（1934・35年）から「永遠・歴史・行為」（1940年）までの「種の論理」諸論稿を主要な考察の対象としている。

#### 4. 内容の概観

##### 第1部 「種の論理」の生成

「種の論理」へとつながる発想は田辺の思想の中でいつ、どのような必然性に基づいて浮かび上がることになったのか。本博士論文はその時点を1930年の「西田先生の教を仰ぐ」に定めた。田辺による西田哲学批判が考察の出発点となる。「絶対無の自覚」という西田の思想は、悪や反価値に根ざした現実のあり様をつかみえないのではないかというのが田辺の疑念であった。「絶対無」が決して歴史的生の原理たりえないことを指摘するために田辺が持ち出した「否定原理」が種の原型的発想に他ならない（第1章）。当初絶対者の否定的他者として想定されたこの「否定原理」は、ハイデガーとの対決や人間学への関心に規定されて身体性の構造として内面化され、そこに「弁証法の基本的所在」が求められることになる（第2章）。それと同時に、歴史における個性性と全体性のあり方をめぐる問いが、一度は拒絶したはずの西田の「絶対無」の概念を田辺の思索に呼び寄せることになる（第3章）。身体性と「永遠の今」としての「絶対無」というこの二つの思想が田辺のヘーゲル解釈に確固とした拠点を与えることになる。そのことによって、田辺は西田的な「述語の論理」という磁場から離脱することが可能となったのである。それが「繫辞の判断論」と呼ばれるものである。

繫辞（コプラ）による個別と普遍との媒介という「繫辞の判断論」が、後に特殊としての生による両者の媒介を主張する「種の論理」へと展開していく（第4章）。

## 第2部 「種の論理」の構造と展開

本博士論文の考えによれば、「種の論理」とは生を特殊性において捉える論理に他ならない。生を特殊として理解することがなぜ生の論理という意義を持ちうるかと言えば、それは田辺において特殊性とは媒介性のことであり、この媒介性が論理的であることの本性的なものに見なされるからである。このような発想によって、現実的で生き生きとしたものと論理的なものという異質な両者が、それぞれの固有の価値を損なうことなくいかに相互に交流できるのかという問いに対峙しようとしたのである。そのような田辺の生の論理が持ちうる思想的意義を西洋の同時代の思想潮流との関係で明らかにした（第1章）。生が個体と普遍とを媒介する特殊であるということは、個や類とは区別された生という次元すなわち種が、個が類的なものであることを可能にするということの意味する。これが田辺の「社会存在論」である。第一にこの立場は、種的なものが個や類に解消されることのない第三の項であることを主張するものである。すなわち、種が個とは異なるというのは、個体相互の関係性を超えたもの（種）が「社会的なもの」の根拠であるということの意味し、種が類と異なるというのは現実に現われた様々な共同性（種的社会）の延長線上に類的社会は求められるべきではないということの意味する。しかし第二に、この種が個と類との媒介としても考えられるのは、個体にとっての無意識的な基底ないしは母胎としての種を自覚にもたらしことを抜きにして、個が類的であることを可能とする共同性のあり方は問題にできないと考えられているためである。そうした共同性は田辺にとっては国家であり、その意味で田辺の「社会存在論」は政治的権威の正当性を基礎づけることを目指した政治哲学でもある（第2章）。

当初「社会存在論」として提唱された「種の論理」は、その後田辺によって種々の修正や原理的なレベルでの変容を経験することになる。そのような「種の論理」の展開の動因となったものは二つある。一つは「絶対媒介の論理」であり、もう一つは歴史の問題である。「絶対媒介の論理」において種は基体という意義を担い、それと主体的個との交差によって「世界」という立場が開かれると田辺は考えた。それは、時間性の立場に偏重した歴史論（西田・ハイデガー）を空間的なもの・社会的なものに媒介する意義をもち、それこそが真の歴史哲学を可能にすると考えられた（第3章）。しかし、「種の論理」の論理的側面としての「絶対媒介の論理」は、「種の論理」そのものに根本的な再考を促すことになる。あらゆるものが媒介された仕方存在することを主張する「絶対媒介の論理」においては、媒介者たる生もま

た媒介されたものとして理解されなければならないからである。種の自己否定性とはそのように把握された生の自己媒介態としての本質である（第4章）。このような「種の論理」の練り直しと同時に、高橋里美と務台理作からの批判は、田辺に自らの論理の独自の立ち位置を明確に自覚させることになる。また、田辺の歴史的生の論理たる「種の論理」は西田の歴史的生命的論理と並べて論じた場合においてもその固有性が主張されるものである（第5章）。「絶対媒介の論理」は田辺の思索にさらなる展開をもたらすことになった。それは「絶対無」のあり方そのものに関わっている。「絶対媒介」の立場から見れば、無もまた媒介されるべきものである。無の媒介者は有以外にはありえないから、当然にもそこからは有との媒介における無という見解が帰結する。しかし、歴史における全体性を個にとつての「超越的全体」と考えていた田辺においては、無は求められた普遍性として有限の向こう側に仰ぎ見られるような無限という性格を多分に有していた。しかし、これは田辺の媒介性の立場に反する。無は有の向こう側にあるものとしてだけではなく、有そのものに己を顕現するものとしても考えられなければならない。これが、田辺が言う無の「還相」面である。このような立場が当初の歴史哲学への関心と結びついて、国家を歴史の主体とする「国家的存在の論理」を田辺に提唱させると同時に、より原理的には永遠の時への「還相」を主張する「歴史主義的時間存在論」を生み出すことになった（第6章）。

## 結論

「種の論理」の本質的構造が生を媒介の相において捉えることにあり、それが今見たような生成の前史と展開の具体面を持つものと理解されるとして、「種の論理」は結局のところ田辺の思想全体に何をもちこたせたのであろうか。「種の論理」が「懺悔道」の立場を端緒とする後期哲学の否定的な踏み台ではないとすれば、それはいかなる積極的価値を持ちうるものとして考えられるであろうか。すでに触れているように、そのようなものとして考えられるのが歴史主義という立場である。

「種の論理」の最終局面の田辺の思索と「懺悔道」の立場との間には、従来考えられてきたほどの距離はない。なるほど、戦前の田辺の思索の終着点をもつばら「国家的存在の論理」に置くならば、それまでの政治哲学的関心から「懺悔道」における宗教哲学への移行は飛躍であろう。しかし、本博士論文は前期田辺哲学の最終局面たる国家論（「国家的存在の論理」、1939年）はあくまでも翌年の時間論（「永遠・歴史・行為」、1940年）との関係で理解されるべきことを強調する。すなわち、両者はそれぞれ「還相」の哲学の具体論と原理論と言ふべき関係を持つ。そう考えるならば、戦前と戦後の思索の間には非連続性と同程度の連続性があることになる。なるほど、「懺悔道」という立場を介して「還相」ということが具体的に

生じる場は国家から個へと根本的に変容している。しかし、哲学の原理たるべき「絶対無」は自らの他者たる有に現象することで媒介の本性を完遂するというのが『懺悔道』以降の後期田辺の根幹的主張であり、それはすでに田辺が1940年の時間論において永遠と時との関係として明確に打ち出した視点であった。それが「歴史主義的時間存在論」に他ならない。その意味で田辺哲学の地殻変動はすでに「種の論理」の最終段階において生じていたのである。戦後の思索がこの地盤を受け継いでいることは、『懺悔道としての哲学』において田辺が「懺悔道」という立場を「徹底的歴史主義」と名付けていることから知られる。必ずしも目立つものとは言えないものの、この歴史主義という言葉は戦後の田辺が自らの立脚地を表現する概念として用いるものである。歴史主義が田辺の哲学的立場の端的な表現であることは、後期の思索のエッセンスともいえるべき『数理の歴史主義展開』という著作の表題が示している。

歴史主義という立場の成立、これが「種の論理」の展開が田辺の思索にもたらした積極的な成果であったとすることができる。それは「絶対媒介の論理」と歴史哲学への志向という「種の論理」の二つの動力の産物以外の何ものでもない。国家を歴史の主体とする「国家的歴史哲学」の構想は放棄されるものの、歴史哲学への関心は「懺悔道」において一層強くなっていく。『懺悔道としての哲学』において、ハイデガーの議論を参照にしながら、歴史性の概念の重要性を語っていくことがそのことを物語っている。